九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Into a Chaotic World : The Breaking of Boundaries in Thomas Pynchon’s V.

Hoshiko, Nami
Graduate School of Humanities, Kyushu University

https://hdl.handle.net/2324/1498288

出版情報：九州大学, 2001, 修士, 修士
バージョン：
権利関係：

Into a Chaotic World: The Breaking of Boundaries in Thomas Pynchon's *V.*

混沌の世界へ―トマス・ピンチョン『V.』における境界の解体

平成 12 年度入学

人文科学府　言語・文学専攻

英語学・英文学専修　　2LT00027P

星子　奈美

平成 14 年　1 月

本論文では、トマス・ピンチョンの『V.』における、対立された概念に注目する。二項対立が解体する状況と、それによって現われる混沌の意味について論じてゆく。

第 1 章では「情報」と「雑音」の対立について考察する。ハーバート･ステンシルが追い求めている V.という謎は、人名や地名の頭文字として、あるいは V 字型の図形として、小説内のあらゆる場所に現われる。しかし、本来手がかりとなるべきこれらの情報は断片的で、集約することは困難である。そこで、情報に対してステンシル、そして読者がどのように反応してゆくことになるのかを、情報の解釈・取捨選択という観点から考察する。

ステンシルの謎の探求における特徴としては、解答に近づきそうになったらあえて遠ざかること、手に入れた情報を都合の良いように変化させること（「ステンシル化」）の二点が挙げられる。探求の中で、彼は、V.は西洋諸国の外交関係における「陰謀」に関わっているのではないかと考えている。

増殖してゆく情報に直面するのは、ステンシルだけでなく、読者も同様である。ステンシルの語りには情報を変化させた部分があるという言及を読んだ読者は、ステンシルによって与えられた情報を、そのまま謎解きの材料にすることはできない。また、読者が小説『V.』を読む過程で出会う V は、ステンシルが彼の探求において見つける V.の謎に関する情報量よりも多い。

更に、情報自体だけではなく、それを受容する人間の意味付けや解釈が問題となる。V.の謎を解く場合、ある要素を「謎を解くのに役立つ」と判断すれば、その要素は「情報」になり、そうでなければ「雑音」になる。しかし、もしそのような選別を行わなければ、全てが「雑音」になるし、逆に「情報」という語を広義に捉えるならば、「雑音」も「情報」の一部である。更に、「雑音」というと否定的イメージがあるが、V.という謎が収斂しないことで、謎が謎として存続し得るのである。つまり、「情報」と「雑音」という対立構造とその序列には流動性がある。

第 2 章では、この小説において頻繁に登場する“inanimate（無生物）”という概念と、その対立項である“animate”の関係について考察する。小説内では両者の関係性、特に機械と人間の関係を描いた様々な例が描かれている。ベニー・プロフェインは、無生物が自分に対して敵意を抱いているように感じる。一方で、自動車や機関銃など、無生物を愛好する人々も多く登場する。整形手術などで人工物を人間の体内に埋め込むことは、生物と無生物の融合の一例であり、最たる例は、V.の女の一人、「悪司祭」の身体で、彼女が死に際に体内の人工物を取り上げられるシーンは「悪司祭の解体」と称される。また、個性的なロボット達は人間味を帯びている。生物と無生物が物理的に融合せずとも、戦争で疲弊した人々や、虐殺の被害者となった人々の、人間性を喪失した状況も描かれている。

生物と無生物の境界の曖昧さは世界の衰退の暗示として解釈されることが多い。これは、『ヘンリー・アダムズの教育』における、人間が機械の力を制御できない時代の到来というテーマが、『V.』においても用いられていることに起因する。しかし、この「衰退」のテーマはステンシルが「ステンシル化」によって導き出した解釈と同じであるため、読者はこの解釈に疑いを持ち、「人間性」の定義を再考察することになる。

例えば、プロフェインは無生物が苦手なだけでなく、女性との関わりも苦手で、彼自身

が人間として扱われることも好まない。つまり、彼の無生物嫌いは、自らを無生物と区別するためのものではない。さらに、人間の身体機能を機械的システムとみなす考え方は以前からあったものだが、そこに「衰退」の暗示を見出すのは、その考え方が単なるメタファーではなく、実際に機械が人間に近い機能を持つようになったからだ。つまり、人間は自らが造ったものに圧倒される感覚を「衰退」と感じるのだ。また、人間には最終的に、「死」という無生物状態が訪れるが、無生物はそもそも生命を持たない状態で機能するため、不死性という観点からいえば無生物は生物より優位に立っているといえる。

このように考えてゆくと、無生物を支配可能だと考えるのは人間の過信であり、そもそも両者の間に絶対的優劣の差はない。すなわち、生物と無生物の類似性それ自体は「衰退」の暗示だとはいえない。生物と無生物は、それぞれが両方の性質を持って補完しあっているため、両者の混合は、「生物が無生物化する」という一方向性のものとして説明しきれない、より複雑で混沌とした状況を示している。

第３章では、「温室」と「街路」について考察する。『V.』の中では、ステンシルが「温室」的人物、プロフェインが「街路」的人物として形容される。温室と街路は、見かけ上正反対の要素であるが、実際は単純な対置ではないことを、エントロピーの概念と時間の概念から証明する。

熱力学の第二法則によれば、閉じたシステムにおいては、その中で混沌の度合いは不可逆的に高まってゆく。「温室」は密閉された空間であるから、秩序は徐々に崩壊する確率が高い。またこの法則によれば、閉じたシステムでエントロピーが増大すると、最終的には熱の移動が行われない、均一化した「熱死」の状態が訪れるというが、温室的状況を示している第 9 章のフォプルの屋敷も、秩序が崩壊し、停滞状況へと辿り着いている。また、ステンシルの導き出す仮説は、温室の構築として捉えられている。

「街路」に関していえば、プロフェインは街路に生きる人間である。しかしながら、プロフェインは街路に対して居心地の良さを感じているわけでもない。プロフェインの街路に関する悪夢はエントロピーの増加するイメージと類似している。一見、街路は、閉じられたシステムとしての温室と対置された、開かれたシステムを持つかのように思われる。しかし、街路もまた秩序を失い、混沌の様子を示す例が多くある。

次に時間という観点から見てみると、温室が過去、街路が未来もしくは夢になぞらえて対比されている場面がある。その一方で、二十世紀を街路に例える登場人物がいることから、街路は、過去－現在－未来を包含する時間的概念だと見なすこともできる。ステンシルもプロフェインも、二十世紀の街路を通過する人間であり、その行動が過去をつくり、未来へとつながるのである。さらに、移動するという行為は、彼らの活動状態を意味する。これは、彼らが「温室」を象徴するにせよ、「街路」を象徴するにせよ、それらのシステムが未だ完全な終局に至っていないことを示している。「温室」と「街路」、ステンシルとプロフェインは、対立した構造として現われながらも、共通した部分も多い。「温室」と「街路」は、言わば、小説の風景を形成する町並みの要素だ、と表現することもできる。

以上の 3 章で、二項対立が単純に正反対のものではなく、対比させる行為自体を考え直す契機としての役割を果たしていることを示してきた。そこで第 4 章では、境界線の解体

した、混沌状況にある小説としての『V.』、という視点からこの小説を検討してゆく。

これまでに考察してきた境界の解体に関して注目すべき点は、対立概念が互いに似ていても、完全に融合するわけではないという点である。「中庸」はこの小説においては解決策ではない。そもそも、小説が言語から成っているという点が、要素の融合を根本的に不可能にする。何かを言語によって表現することが、すでに世界を切り分けている。そのため、小説世界において、要素が完全な融合を果たすことはない。

ここで混沌をどのように定義付けるのかに注意しなければならない。この小説で描かれる状況は、「熱死」のような均質化ではない。この小説における二項対立の解体、そして混沌は、単純さの欠落だと見なせる。つまり、物事を比較させる行為自体がシンプルな構造を構築するものではなく、かえって複雑さを際立てるのだということである。そして、この小説における混沌は、差異の消失としてではなく、個々の断片、モザイクとして表現されていると考えられる。

『V.』の断片的性質は、扱われる時代、場所、人物の多様性として現われる。またこの小説には他の文学作品や思想書への言及や、それらのテクニックの利用がある。さらに、エピソード数の多さは、この作品を要約することを困難にする。物語における断片に注目すると、更に発展させて、マイナーなもの、周縁のものに対して目を向けることの重要性にも気付く。

個々の要素が点々と散らばっているだけでは、読者は意味を読み取ることが出来ない。だが、『V.』ではエピソード同士が結びつくような仕掛けがある。例えば同じ単語が繰り返し用いられることにより、異なるシチュエーションが関連付けられている。そのため読者は、単純な一本の幹を見出すことは出来ないとしても、複雑に絡み合った要素の統一体として、この小説を見ることが出来る。

『V.』では断片的なエピソードが散りばめられていながら、それらが網の目のように弱い結合で結びついて、複雑かつ統一的な物体を形成しているように思われる。この小説の「混沌」は、全ての物質の差異が解消した状況ではない。秩序正しく並んでいない、ランダムなエピソードの断片の集積としての混沌である。

第 5 章では、これまでの議論を踏まえて、「V.とは何か」という基本的な問いに立ち返り、更には「V.とは何か」という問いを発する行為を問い直す。

まず、V.が一個の確固とした個体として定義されない断片的性質を持っていることによって、その概念が拡大してゆくことに注目する。V.は記号・情報であると同時に、身体でもある。これにより、情報という形状を持たないものが実体としての存在感を与えられ、空間や時間の隔たりを超えて出没する怪物的人物としてのイメージを形成する。

また、V.に関する情報に注目した時に見えるのは、ヴェイシューという土地が表現している表面性や、アンドロイド的な身体、特殊な性的嗜好といった異端性である。V.の周縁的、あるいはネガティヴだとみなされるであろう性質の中でも、最も目立つのは、やはり「混沌から退廃への進行」のイメージであろう。だが、その状況を彼女がコントロールしているとはいえない。V 情報はいかなる場所にも存在すると考えられるため、退廃の相を示す V を集めれば、その V の集合体は退廃を示しうるし、たとえ情報選択を行わなかったとしても、V.が退廃を暗示するものだという確率は高い。もし、V 情報のすべてを列挙し

たリストを作るならば、そのリストはかなりランダムな状態を示すであろうからだ。V.という概念は、その内部にも、『V.』という小説内で起こる二項対立の解消、境界線の解体を抱え持っている。

ここで改めて問題になるのは、これまで述べてきたV.という概念が一体どの範囲まで含んだものとして定義付けられるのかという問題である。その境界線もまた確かではない。そこで人間の認知活動における曖昧さ、「V.とは何か」という問いかけ自体の曖昧さに注目することが必要である。

V.の謎に完全な答えが出ないのは、扱うべき情報の枠の設定がはっきりしていないからである。枠が設定されなければ、対象範囲は無限に広がり、過剰な情報量は認知活動の妨げになる。しかし、『V.』という小説に意味を見出そうという試み自体が不可能なのかというと、そうではない。大まかな認知方法（ヒューリスティックス）によってある程度の意味を見出すことが出来る。たとえ現実世界で問題にならない程度の認知機能の大まかさであっても、この小説では、ステンシルという解釈者を小説内に存在させ、その謎を追う行為を「ステンシル化」と名づけているために、読者は普段は意識しないでもよいはずの認知の大まかさを自覚することになる。

完全なV.の解釈は、実際のところ存在しないだろう。しかし、読者が、この解釈で妥当であると満足するならば、その解釈が全て答えにもなりえる。その段階に辿り着こうと何度も認知の枠を試行錯誤しながら作り変えてゆくことが、V.の謎を前にしてわれわれが取り得る最も真摯な態度だといえるかもしれない。

以上の議論から結論付けるならば、『V.』においてはあらゆる二項対立が曖昧化し、特に優劣の序列が解体している。また小説内のエピソードの多様性によって、人間の認知機能の曖昧性が明らかになる。

『V.』という小説における曖昧さは対立概念の混合だけにとどまらない。そもそも境界が曖昧であるはずの概念を言語によって切り分けるという行為も更なる混沌の原因となる。だが、混沌は謎のV.という多様体を構築する可能性を持った場として、この小説に必要不可欠な要素だ。そして、小説を読む行為は、本という閉じたシステムに外部から働く力であり、解釈によって混沌の中に秩序をつくり、エントロピーを下げようとする。しかし、認知行為の曖昧さに気付かされることによって、読者は自らの解釈におけるエントロピーの高さにも気付く。すなわち、『V.』と読者とは絶えざる運動を生成する相互作用的システムなのだ。